

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 唐 聡

本研究は、日本の古代において特殊な柱配置を持つ山田寺金堂の形式について、類例を中国建築に探し、その東アジア全体における位置付けを検討したものである。

研究を進めるにあたって、山田寺金堂（643、奈良）をはじめとする 4 例の日本古代の金堂遺跡に確認される隅部の特異な柱配置を「隅一柱式」柱配置と呼び、このような柱配置をもつ建物を「隅一柱式建物」と定義した。これに対し、法隆寺金堂のように桁行、梁行及び斜めの三つの方向にそれぞれ柱が配置されたものは「隅三柱式建物」と命名した。

そして、日本に実在した 4 例と類似の柱配置を持つ建築を中国に求めた結果、敦煌壁画

のなかに多数発見した。これらの分析によって、隅一柱式建物が古代の東アジアに広く分布したのではないかと、という仮説の証明を本研究で試みている。

論文は全3部、全7章と結論から構成される。

第一部（第1章）は、日中韓における隅一柱配置をもつ建物の現存例を集め、平面規模と上部構造に注目して分析した。その結果、まず上部構造により隅一柱配置の建物は裳階型と庇型に分けられることが分かった。庇型は事例が僅かであって、しかも平面の桁行規模が母屋一間と三間のものに限られるのに対して、裳階型は多数現存しており、母屋五間のものまで確認された。

第二部（第2～4章）は、敦煌壁画において、初唐から曹氏帰義軍時代まで（619-1036年）の49点の隅一柱式建物建築図が確認された。そこに描かれた建物の類型により、塔の隅一柱式建物建築図、城門楼の隅一柱式建物建築図、楼阁・仏殿の隅一柱式建物建築図の三種類に分けられる。この三種類の隅一柱式建物建築図について、類型ごとに絵画の特徴を考察した。同時期の隅三柱式建物建築図と比較して、隅一柱式建物建築図としての描法上の特徴を明らかにした。さらに、隅一柱式建物建築図の描法も時代の流れとともに変化してゆくことを明らかにした。

第三部（第5～6章）は、第二部で取り上げた楼阁・仏殿類の隅一柱式建物建築図に基づき、そこに描かれた古代隅一柱式建物の建築的特徴を考察した。まず平面規模と空間構成については、全ての絵図に描かれた隅一柱式建物は平面の桁行規模が母屋三間以下の小規模建築に限られ、閉鎖的な母屋に吹放しの四面庇がつく空間構成が共通する特徴として認められた。次に軸部構造、特に組物については初唐期と吐蕃・曹氏期に分けてそれぞれ特徴が認められた。

結章では第二部、第三部で考察した隅一柱式建物建築図の特徴を、第一部で考察した現存例の特徴と比較した。まず成立時代については、建築図が全て古代のものであることに対して、現存例はほぼ中世以降のものである。次に構造については、建築図に描かれた隅一柱式建物は庇型が主流であることに対して、現存例では裳階型が圧倒的多数を占める。それにより、古代隅一柱式建物の構造上の特徴は、現存例が多い裳階型とは違い、庇型であることにあると考えられる。最後に、敦煌壁画に描かれた古代隅一柱式建物の構造上の特徴を参考にして、日本の古代隅一柱式の金堂遺跡である山田寺金堂と夏見廃寺金堂の上部構造の再検討を試みている。

本論文は、古式と思われる山田寺金堂の柱配置の検討からスタートし、その類例を東アジアに広く探り、中国の敦煌壁画のなかに多数の類例を発見した。このこと自体、これまでにない知見であって、本論文の優れた研究成果と認められる。現実をどの程度反映しているかどうか、という点について慎重な史料批判が必要となるが、著者は緻密な分析によって、その課題を乗り越えた。

その結果、日本の山田寺他に僅かに痕跡を遺していた特殊な建築技法が、実は中国に存在していたこと、その遺制が後々にまで残っていたこと、を明快に論じたということになる。本論文は、日本、中国の古代建築史の世界に重要な論点を提供したと言えよう。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。